

兵隊司令部に捕った。対ソ作戰要員となっていた私はシベリア行きを覚悟した。

当夜八時から十一時半まで将校二十余人いる中で取調べを受けたが、落ちついて応答できた。

隊長は「お前はソ連に好感を持っている。レニングラードの大学に入れてやるからソ連に行かないか、またはスパイをやってくれないか、もし承知すれば、二十一日朝九時釈放する」とのこと。私は後者を選び、釈放されるや、そのまま地下にくぐった。

二十一年四月、ソ連軍が引揚げるや、長春日僑善後連絡所に入り、引揚げ事務所に従事した。

隣組編制の引揚げが完了したところで、八路地区よりの引揚げが始まった。

二十一年九月初め、蒋介石総統の日本人は全員帰国せしめよの命令により、中国軍、特務、警察を動員して満人街にくぐった若い婦女子を満鉄の青年寮の二階強制所に収容した。そして軍と警察が逃亡しないように警備についた。彼女等は理由があつて日本に帰れない人がほとんどである。

八路地区からの引揚げ輸送が終わった後、私は引揚げ相談所の副所長として、金がなくて、隣組の団に入れなかった人、満人街に働きにいつて状況がわからなかった人等を集め、姑娘部隊とあわせて一五三大隊を編制し、中国の徵用解除される人で一五四大隊を編制し、長春最後の引揚げ者、七十七団の編制の準備をしていた。

十月三日、七十七団は出発した。

西の収容所についたが海が荒れ、十日ばかり運航が止まったため、引揚げ者はあふれ、七十七団が入った収容所は屋根、窓、戸がない建物、アンペラの上にアンペラをかぶって寝るありさま。輸送船秋の輸送隊長として、二十一年十月十九日、ぶじ博多に上陸。ようやく故国の土を踏んだ。

産婆として生きぬく

大阪府 富岡 次子

昭和十五年十月、主人は当時の国策にしたがい、北辺

鎮護と食糧増産のため、鋏の戦士として吉林賞敦化県青溝子開拓団に入植した。もっぱら開墾と建設のため、日夜奮闘した。私は翌年五月助産婦として入植した。団の構成は、本部中心に九部落であり、大阪からは入植がおそかったため、住む家がなく、現地人廃屋の家で、雨の日は家の中で傘をさし、又小ネコほどのネズミに襲われる等で困った。第一は、建設と食糧確保であった。皆は慣れぬ手に鋤、鋏を持つての農作業にはげんだ。私にはそれに加えての本職があった。入植者の増加と共に多忙となり、ほとんど毎日のように産家へ訪問となった。

部落から部落へは近くて一里、遠くは三里ぐらいにもなる。最初は徒歩で、後には乗馬で、夏は四十度近い炎天下、冬は零下二十度から三十度の山道で、息も凍り、声も出ない。夜道を苦痛に思ったことは一度もなかったが、ただ雨期の道路には最も困った。ときには、オオカミにも出会い、驚かされた。私を迎えにきてくれる人も初めは四、五人で銃を持ち、カンテラの光を頼りに歩いたが、送迎してくれる人はしだいに応召して少なくなり、心細くなった。最初は無医村で、病院等はるか遠く、

一時の油断も許されなかった。部落への道のりは遠く、なんとか間に会うよう、またぶじに取扱いたいとそれのみ神仏に願う日々であった。ぶじ出産を終えたときの安堵と喜びはなにもたとえようがない。また出征家庭の人にはよりいっそうの責任と心配であった。ぶじに親子揃って順調に肥立ってゆく姿を見る時、なんともいえない喜びと満足感をおぼえるのであった。住宅ができ、年と共に増産もし、原住民の人達共親しく交流ができて、自由もなくなった時、突然に終戦の嵐が吹き寄せてき、八月十九日を境に親しかった友とも別れ別れに流浪の旅が始まった。群を離れた子ヒツジの如く、右往左往するのみ。前途はまったく暗たん、いつの日、祖国に帰られるかわからないままで日々を匪賊に追われつつの逃避行に心身共に疲れと恐怖のため、運を天に任せて一部の人は都会へ、また一部は現地へと。私達は現地に戻ったが、そこには、日本兵狩り、など苦難の道は続く。そのため、南下してきた難民の人達もこれに耐えきれず、団を脱出、つぎつぎと団員の家族も脱出し十一月十九日には数家族を残し団を去った。

その後、匪賊の襲来はなくなり、じよじよに安定してきたが、私の職業のおかげでいつのときも災難から逃れることができたのを知り、しみじみとありがたく感謝した。この頃八路軍によって治安は治まり、農作業は楽にできた。これもまたなにかと現地の人や鮮系の人達の厚意と協力があつてのことで、収穫も十分、ありがたく、嬉しかった。

二十一年九月一日になって、八路軍の兵士に守られて現地を出発することになった。途中、吉林・新京・錦州をへて十一月二十六日大阪に着く。かつての子ども達も四、五人を残しほとんど亡くなったことが残念で空しさをおぼえるのである。私に与えられたことは彼の地で亡くなった人達のために回向することであると思つてゐる。

橋頭で終戦、ギユウギユウの貨車で

福島県 岡崎 タカ子

私は、終戦を満州の橋頭で迎えた。家は満鉄の生計分配所を営み、満鉄の人達の生活物資の販売を満人三人で使用し、昭和十六年から開業していた。終戦の報で使用人と倉庫の塩、砂糖、小麦粉、油などの物資を暴動前に配給し、倉庫をカラにした。物資の暴動は起きなかったが、毎日が生きた心地がしなかった。使用人三人は、八路軍に入隊した。まもなくソ連兵が大勢入ってきた。私は満人に守られ、ぶじ逃げる事ができた。街の中には負傷兵があふれ、日本人は人民裁判にかけられていた。父は外出せず、情報を受け、じつと時を過ごした。私も妹も丸刈り頭で男装をし、屋根裏で生活した。ご飯をザルにいれてひもでつり上げて運んだ。便所はバケツにぼろ布を敷き使った。夜はローソクであかりをとった。治安が少々落ちついた頃には、妹と煙草売りをした。知り